

地域文化の芽

これからの横浜文化を考えると、近年の人口急増で郊外に定着してきた新しい市民の役割は大きい。各地域で盛んに行われている地域活動のなかから、新しい文化形成の芽が現れ始めている。そのうちのいくつかをみてみよう。

地域文化とは何か

横浜市大文理学部教授 越智 昇

なぜ地域文化が問題になるのか。それは、民衆がその生活の場から自覚的に歴史をつくり営為として意義づけられる、と考える。ということは、このような営為として意義づけられるものと、然らざるものとは峻別されねばならないことになるわけだ。このように考えるすじ道をのべるには与えられた紙数をかこたねばならないが、それなりに、いささか図式的展開によって思うところをのべることをお許し願いたい。

つくれなかった「内なる文明」

文化が歴史にどうかかわったかを論じた学者は少なくないけれども、なかでもM・ウェーバーは光っている。かれが、なぜヨーロッパのみ資本主義の歴史が発生したのかを論じて、それが、プロテスタントの倫理観に強く影響された面があることを論証したのは有名なものだった。宗教改革によって純粹な人間、普遍的な人間という人間像が形成され、その人間は神の召命としての職業倫理をも

地域文化とは何か——越智 昇
地域文庫——長崎源之助
いずみ文庫の八年間——茂木瑠理子
福祉活動——簡 照子
自主幼稚園——編集部
ひまわり幼児教室——田中佳子
ミニコミ——編集部

つ。この職業のエートスが内面倫理として資本主義の形成にあずかったとみた。ではなぜ東洋ではそうした資本主義の歴史が発生しなかったのか。それをウェーバーは、東洋文化は儒教に典型的にみられるところの外面倫理に支配されたものであったからだ、とみていた。ウェーバーは決して、生産力の発展を否定したわけではなく、大塚久雄風にいえば複眼主義だが、とにかくここでは、資本主義論争が目的ではない。文化が歴史形成に重くかかわっていること、そして、内面倫理としてかかわる意義を例示したまでである。

ところで、東洋の一国日本は封建社会の武士支配のもとで、武士社会秩序の文化としての儒教的外面倫理を強く持っていたのはたしかだが、果してそれだけか。明治政権が富国強兵を国是として資本主義の中央集権国家の急造をはかったがい、かの福沢諭吉は「文明論之概略」のなかで、基本的には賛成しながらも、政府が西欧の「外なる文明」をとり入れるに急で、西欧人が機械や制度などの文明を自力で起してきた内面的な文化としての「内なる文明」をとり入れることを忘れていてと批判し、むしろ「内なる文明」を先にとり入れるべきだ、と主張した。同じような趣旨で、明治末年には夏目漱石も、日本の文化が深みにおいて形成されずに、「ただうわすべりにすべっている」と嘆く講演をしていた。近代日本の

都市では以来、ヨーロッパナイズされた豪華けんらんたる「文化」が充満してきたようにみえて、その実はこれら識者の批判に反証をあげることができなかつたのではないか。自前の新しい「内なる文明」、「内面倫理」を確立しえないままに、「文明国日本」は、武士社会の支配倫理＝儒教倫理を焼き直して天皇制下の秩序確立のための文化原理としてあまねく国民教化をすすめたのだった。

「世間」倫理が体制支える

果してそれだけか？ とさきに自問しておいたが、それだけではなくて、実は、日本社会には、ちゃんと特定の「内面倫理」があった、というのが私の見解だ。何か。それは伝統的農民の地域社会で作り上げてきたものだ。農民はたえず支配者の収奪におびやかされながら、篤農型相互扶助の倫理を身につけてきた。信心と一体になった没個性的なこの倫理がそこに閉鎖的な「世間」をつくり出した。ところで、都市の資本主義的成長は、この農民の内面倫理を農は「国の本なり」として引き出し、低賃金労働力として、また、滅私奉公の倫理にすりかえて食いつぶしてきたのだ。明治以来の富国強兵の歴史はこの文化によって支えられたといつてよい。つまり、農民がその地域社会で形成した文化が巧妙に利用さ

れ食いつぶされた結果、日本の政治経済の隆盛と悲劇となった一面をみる。しかしそれは農民の責任ではない。

文化としての民主主義

創出の苦しき

われわれは民主主義の時代をむかえてすでに三〇年を超えた。しかしながら「文化としての民主主義」をどれだけ内実化したか。むしろ、欲望のおもむくままに個人あるいはマイホームの発展を謳歌してきたらいいはないか。そのことが、いつでも管理社会化の波に吞まれて、不知不識のうちにファシズムに加担する可能性を増殖してきたのではないか。この間、実際にそうならなかったのは、労働組合や知識人、文化人たちが先進的に危機を叫び、勇敢に対処して世論をリードしたからではなかったか。しかし過去十年來、あるいはもっと前から、ただの市民・住民が生活の論理を確立しようとして地道に動き、その質が今や新しい時点にまで高まろうとしている。その動きを個別的・微視的にみれば、たしかに、浅い次元での地域エゴイズムとか、偏狭な党派的主張とみられないこともないが、文化としての民主主義を生活の場から創出する過程という、普遍的・巨視的なパースペクティブのなかに位置づけてみる必要があると不可欠である。

横浜市のように、国の高度経済成長の波を強烈に受けた都市では、伝統的な地域生活に無縁な新市民層が急増して、個別地域課題として、住む身になればのびきならない都市問題が激増してきた。そこへ業者が目を付けて利潤追求のチャンスを求め、行政は不当に制約された自治権と限られた財政規模のなかで、全市民的課題と個別課題の調整にいらだててきた。横浜市民にとっての、文化としての民主主義を創出する生活の論理は、いやでも大方は、こうした状況とかわり、それを自主的に突破するなから生成されざるをえなかつたのである。この文化を生む者は、まさに地域住民である。それは必ずしも安産ではない。だから、行政や諸団体は、この産婦住民と共に陣痛を苦しめ、文化出産の条件整備にあたる役割を強く持つものである。

生活の場にも自治定着の芽

私が単純に住民運動を礼讃しているのではないことは理解されよう。いいたかったことを小括すればこうなる。いわゆる「近代」日本では、かつての農民が長い「農」を生きたる地域生活の中から作りだした「内面倫理」としての文化を食いつぶしながら、支配秩序としての、生活の場に根づかない「外面倫理」を強要してきたが、さて、民主化の三〇年余、

本当に民衆の生活文化がどれほど積み上げられてきたか。昭和三〇年前後に高まった大都市周辺でのユニークな活動（「生活記録」や「話あい」、「歌声運動」、「生活改善運動」など）は、高度経済成長、政治・文化の中央集権化、マスコミの発達による消費文化と疑似環境の拡大ないしは画一化、欲望ナチュリズムの増幅に、もみくちゃにされて消え細り、他方、大都市にむけての人口の大移動によって根無し草のもだえがつづく。そして、都市問題の主體的に立ちむかわざるをえない状況、根をおろす共同の土台を住みつき態度として形成せざるをえない状況が起り、そこに新しい自治の芽が発生してくる。それが内面倫理として定着するとき、民衆の歴史が作られるのだ。そこに、地域住民のひとつの自覚過程として住民運動があった、というのである。

しかし、そのような、民衆が歴史をつくるどころの、文化としての地域民主主義の自覚過程は、対抗的運動としてはなばなく顕現されればよい、というのではない。川崎市の菅生子ども文化センターは昭和四七年から四年がかりで実現をみた母親の運動の成果であるが、その間、母親たちは学習をし、共同保育をやり、地域の子は誰でも何処でも地域のオパサンたちに暖く見守られている関係ができ

た。行政も既存地域住民組織も、これに
対して、そこに「子ども文化センター」
が必要でない、という論理をもてなくな
った。こうして出来たセンターは、管理
者である行政の規則一点張りでは動かな
い血の通った活動を始める。母親とセ
ンター職員は議論し学びあい、自己変革
をくりかえす。そして、職員はその地域
にすすんで転居し、あるいは「教育学を
やり直す」と大学の通信教育を受けはじ
める。十年間は少くともこの仕事に打
ちこむ」と決意する。母親たちはこの
「子ども文化センター」にどう会ったか
として、地域社会の内面論理を形成しつ
つある。これは、福祉・教育(共育)・自
治を一体のこととして住民が主人公にな
り地域文化を創造してゆく清新で感動的

地域文庫の活動

全国の一割が横浜に

地域文庫が多いのはわが国の特色だそ
うです。全国で約三千と推定されていま
すが、その一割が横浜にあります。これ
は異常というほかありません。その最大
の理由は、住民の読書及び読書施設に対
する要望が多いわりに、図書館が少なす
ぎることです。それは、図書館のある西

なドラマである。ちなみにこのマチは山
林を開いた典型的な新興住宅地である。
菅生だから出来たのではない。横浜に
も同じ可能態が多様に生起し動いてい
る。文庫活動が、保育活動が、障害者や
老人への福祉活動が。いずれも生活の場
でその地域生活を楽しく、人間らしい共
感と共育の場にかえてゆく文化創造の芽
である。文化には、考えたい、知りたい、
感じたい、表現したい、行動したい、と
いう衝動が必須である。それが生活の場
の状況に応じて個性的に今や実ろうとし
ているのだ。その個性を尊重しあい、励
ましあい、過去の遺産を正しくうけつい
で、市民が生活の場から生きざまとして
の歴史を創造する、そういう文化課題が
まさに現前している、と考える。

横浜文庫の会 長崎源之助

区には文庫が少なく、図書館から遠い戸
塚区、港北区にとくに多いことでもわか
ります。

地域文庫をはじめた動機としては、「わ
が子に本を読ませたいから」というのが
圧倒的に多いのです。そのあらわれとし
て、多くの文庫が、子どもの利用を中心
に運営されています。

小規模のは、縁側に書架を一つ置いた

り、玄関の下駄箱の上に本のはいったダ
ンボール箱をのせ、近所のごく少数の子
どもをあいてに本を読んでやったり、貸
出しをしたりしているのから、会員千人
を越す大規模な文庫まで種々あります。
運営も、個人、グループ、町内会、団地
等これも様々です。

たいいての文庫は、市立または県立の
図書館から団体貸出しを受け、文庫の蔵
書と合せて五百冊ないし千冊位を置いて
いる所が最も多いのです。

開館日は一週に一度が大分で、土曜か
日曜に二時間から三時間位やっています。

世話人は、個人の文庫では一人が多い
のですが、町内会、団地などでは、図書
係が交替でやっています。図書係は、六
人から十人位がもっとも多いようです。

地域の中心的活動に発展

内容としても、ただ単に本の貸出しを
しているだけのものもありますが、文庫の半
数近くは、本の読み聞かせ、読書会、お
話会など直接本に関係のあるものから、
新年会、クリスマス会、なかよし会、ひ
なまつりなど親睦会的なもの、キャンプ、
いもほり、虫とり、プール、サイクリン
グ、ハイキングなどリクリエーション的な
もの、またはピンポン大会、ドッチボー
ル大会、運動会などスポーツ的なもの

と、それぞれ文庫によって、何らかの行
事を行っています。

そして、文庫の運営費を捻出するため
に、バザーをやっているところもかなり
あります。

大人どうしの学習のために、講演会を
開いたり、文学散歩、歴史散歩などをや
っているところもあります。

つまり、地域文庫は、図書館の不足を
おぎなうことから出発して、いまや地域
文化の中心的活動にまで発展しているの
です。

文庫では、大きい子が小さい子に本を
読んでやったり、紙芝居を見せてやっ
たり、あやとりや折り紙を教えてやっ
てる姿を見かけられます。キャンプや遠足
で、小さな子の面倒を見てやる子もいま
す。クリスマス会の司会、運営、本の貸
出しなど子どもの主体でやられるところ
も増えてきました。

私たちは、文庫を本のあるたまり場と
か、遊び場というぐあいに考えていま
す。本を仲立ちにして、人と人のふれあ
う場所だと思っています。

文庫の会で相互の交流

最近の子どものテレビの影響で本を読
まなくなったという声をよく聞きます。
しかし、文庫運営者たちは等しく言いま
す。「それは、子どもの身のまわりに本